

【個人研究】

## 遊ぶことと心理療法 アクスライン、ウィニコット、ベイトソン

岡村達也\*

Playing and Psychotherapy : Axline, Winnicott and Bateson

Tatsuya Okamura

### 要旨

In this paper a free-association-like anthology is the style employed in order to make readers experience directly the matter in question, that is, the intrinsic relationship between play(ing) and psychotherapy.

In Winnicott's words, mirror-playing-paradox and psychotherapy are in its center of free association, around which are Axline's non-directive play therapy and reflection, and Bateson's play-paradox-psychotherapy.

Firstly, being-a-reflecting-mirror is pointed out to be being of the psychotherapist. Secondly, Winnicott's well-known thesis that it is playing that lies in the core of psychotherapy is delineated. Finally, the paradox that is involved both in play(ing) and in psychotherapy, and the paradox that is involved both in evolutionary and in maturational processes of mind are delineated, from which association turns back to the first two points.

As contrasted with being of the therapist, the question of doing of the therapist is raised. Guidelines of giving interpretations, caution for the therapist's doing without his/her being, and the significance of talking between the therapist and the client are derived.

### はじめに

本稿は遊ぶことと心理療法をめぐる自由連想風のアンソロジーの形式を採用した。遊ぶことと心理療法をめぐる事態そのものをそのまま提示するためである。

Winnicott(1958,1964,1965,1971,1989)のこ  
とばを使えば鏡-遊ぶこと-パラドクスと心理  
療法が軸となり、それにAxline(1947)の非指  
示的遊戯療法-反射とBateson(1972)の遊び-  
パラドクス-心理療法がからんできた。

しいて言えば、まず、反射する鏡であるこ  
とが治療者のbeingとして取り出された。次

---

\*おかむら たつや 文教大学人間科学部臨床心理学科

に、遊ぶことが心理療法の核心であるというおなじみの主題がなぞられた。最後に、遊びに含まれるパラドクスと心理療法に含まれるパラドクス、こころの進化過程に含まれるパラドクスと成熟過程に含まれるパラドクスから、ふたたび以上の2点に戻った。

これに治療者のdoingがからむ。解釈というdoingへの指針、beingなきdoingへのいましめ（doingなきbeingも詮ない）、クライアントと語り合うというdoingの意義などがそれである。

## 鏡であることと心理療法

### —AxlineとWinnicott

#### 1. WinnicottのAxline評

さて、次のようなWinnicott(1971)によるAxlineの『遊戯療法』(1947)評は、WinnicottはFreud,S.の徒で精神分析、AxlineはRogers,C.R.の弟子にしてクライアント中心療法などという教科書的概念化によって意外に見落とされ、あるいは、真剣に受け取られていないように思える：「深層に達する心理療法は解釈作業なしに行える。そのよい例がNew YorkのAxlineの『遊戯療法』である。…私はAxlineの『遊戯療法』を特段に高く評価しているが、と言うのは、それは私が私の『治療相談』の報告で強調している点、すなわち、重要なのは子どもが自分自身を突然発見することだということと同じだからである。重要なのは私の才気走った解釈などではないということである。」(p.59)概念化が一方いかに見る目を曇らすか、また、すぐれた臨床家のそれぞれの概念化の底にある感覚の驚くべき符合の一例を見る思いがする。

先立つ1960年代半ば頃のものと思われる『遊戯療法』評もある(Winnicott,1989)。Winnicottは『遊戯療法』から2つの引用を行い、自由連想風にコメントする。

(1)まず、「非指示療法は、個人はみずからの内にみずからの問題の解決に成功する能力をもっているのみならず、未熟な行動よりもより満足をもたらす成熟した行動をとる成

長衝動をもっているという前提にもとづいている。」(Axline,1947,p.14)を取り上げたのち、言う：Axlineの『遊戯療法』は精神分析の実に見事な適用の1つである。Axlineは自分の理論を精神分析と関係づける気はないだろうが、そう言わざるをえない、と。(p.496)

(2)つづけて、Axlineが言っていることは自分が言いつづけてきていることとまったく同じであると言い、Axline(1947)から次の引用をする：「この治療法は、個人がいまいるところから出発し、いまある布置に治療過程の基礎を置く。変化が急すぎるのがあっても、治療的接触中のそのときどきの変化にゆだねる。変化の速さはその個人のこれまでの体験・態度・思考・感情が再体制化されてもたらされる洞察にかかっており、この再体制化が起きるかどうかが治療成功の前提条件である。」(p.14)そしてコメントする：Axlineは洞察にどれくらい重みを置いているのか。重みを置きすぎると理論が窮屈になる。洞察なしの変化があるからである。幼児期や早期児童期には洞察なしに実に多くのことが起きると。(p.496)Axlineの洞察の強調に反対しているかにさえ見える。

さらに言う：非指示療法が個人が自分自身であることを認めるとき、そのことは評価も変化への圧力もなしに完全に受容される。クライアントが表現したものを反射する(reflect)ことによって、情動の態度への現れが認知され明確化される。自分なりに鏡(mirror)ということばで表現しようとしてきた事柄が非常に明確に述べられている。すなわち、最初の鏡は母親の顔であり、母親・両親・家族の機能の1つは鏡を提供することであり、その鏡の中で子どもは自分自身を目に入れる(see)。子どもが両親や家族を鏡として使えるのは、自分がどんなふうであっても自分自身でいることがゆるされ、評価も変化への圧力もなしに完全に受容されているときである、と。(pp.497-498)

洞察(を促そうとする解釈)なしの治療、また、治療者の機能としての反射あるいは鏡、

WinnicottはAxlineに大いに共鳴しているが、Axlineの『遊戯療法』は精神分析の実に見事な活用の1つであるという主張は丁門の一石である。非指示療法の「非指示」を「指示しない」というdoingと取るかぎり、また、解釈を言語的解釈というdoingと取るかぎり、このことの理解はむずかしい(岡村,1999)。両者とも子どもの深い理解という意味での治療者のbeingとしての解釈にシッカリ裏打ちされており、また、子どもが自分で自分を方向づける方向にメタレベルにおいてハッキリ指示的である(cf.岡村,1998)。

## 2. 鏡であること—being

ところで、このことを、Winnicottが鏡ということばで表現しようとしてきた事柄でもう少し見てみよう。Winnicott(1971)によれば、創造的に眼差しを向け(look)世界を目に入れる(see)には、自分が目に入れ(see)られた体験が内在化されていなければならない。この体験は生後数週の母-子関係で自然に起きる。「個人の情緒発達において鏡の先駆は母親の顔である。」(p.130)子どもが母親に眼差しを向ける(look)とき目に入る(see)のは自分自身であり、自己の感覚の確立は母親の顔の中に眼差しを向けた(look)ときそこにある(=目に入る(see))反応にかかっている。

こうした相互作用を心理療法の場に置き換えると次のようになる：「赤ん坊や子どもが、母親の顔の中で、のちには鏡の中で、自己を目に入れる(see)というところから、分析や心理療法作業に眼差しを向けて(look)みよう。すると、心理療法は才気走ったピツタリの解釈をすることではない；およそ心理療法は患者がもち込むものを長期にわたって患者に与え返していくことであるということになる。心理療法はそこで目に入る(see)はずのものを反射する顔の、複雑な派生物なのである。…もしこのことを私が不足なく行えば、患者は自分自身の自己を発見するだろうと考えたい。」(pp.137-138)

この鏡になるという作業は、言うは易く行うは難い：「私は、患者がもち込むものを反

射するというこの作業が容易なものであると私が考えているような印象を与えたくない。それは容易でないし、情緒的に消耗する。しかし、報われる。患者はたとえ治癒していないときでさえ、ありのままの自分が目に入れてもらえる(see)ことに感謝する。」(p.138)

Axlineのことばで言えば反射の意義が記されてあまりあるが、思うに、これはクライアントの側から治療者のbeingが照射されているのであって、単なるdoingとして反射の真似事をやってもうまくはいくまい。こうしたbeingを身につけること、そして、どのようなdoingによってそれをクライアントに伝えていくか、そこに治療者であることの要諦があろう(岡村,1999)。

## 3. 解釈すること—doing

ところで、(洞察を促そうとする)解釈なしの治療があると言われた。しかし、解釈は有力なdoingではあるまいか。Winnicottは解釈を否定しているのだろうか。また、Axlineと精神分析との大きな違いは、治療者が子どものありのままの鏡(になること)にとどまることであり、込み入った解釈がないことであるとも言われる。しかし、そもそも解釈なしの理解などありうるだろうか。Axlineは解釈を否認しているのだろうか。

(1)まず、Winnicott(1971)は、治療者の仕事は、そこで子どもや患者がみずからの力でみずからのためになにかを発見することができるような空間を創ることであり、解釈が偽物の自己(fales self)を創り上げることになるなら、それは似非分析であると言う：「素材が熟していないときの解釈は教化であり、盲従を引き起こす。したがって、患者の遊ぶことの領域と分析家の遊ぶことの領域との重なり合いがないときの解釈は、抵抗を引き起こす。患者に遊ぶキャパシティがないときの解釈は有効でないばかりでなく、混乱を引き起こす。たがいに遊ぶことがあるとき、そのときには、一般に受け容れられている精神分析の原則にのっとった解釈が治療作業を前進させる。もし心理療法が行われるなら

ば、この遊ぶことは自発的でなければならず、盲従的であったり、追従的であったりしてはならない。」(pp.59-60)

(2)そして、Axline(1947)は感情の認知と反射をめぐって次のように言う：「感情の認知と解釈は2つの別の事柄である。しかし、識別するのはむずかしい。子どもの遊びはその子の感情を象徴するが、治療者がその象徴する行動をことばに翻訳しようとするときはつねに、子どもが行動に表現していると治療者が思う事柄をことばにすることになり、解釈していることになる。これは避けがたいようでもあるし、ときには好都合のようでさえある。解釈は慎重に行うことが、しかし、最善の策のようである、すなわち、解釈は最小限に抑えること、また、解釈を行うときには子どもの目に見える遊戯活動に基礎を置くことである。そのときでさえ、治療者は、応答にはその子が用いた象徴を含めるべきである。」(pp.93-94)

たとえば、ある男の子が男の子の人形を取って言う：「女の人がこの子を砂のところにやろうとしてる。この子はこわがってる。泣いて、お母さん、こわいよーって言うんだけど、お母さんは行かせようとする。ほら！ドンドン、ドンドン、ドンドン砂の中に沈んでく。」治療者が、「こわいんだね、でも、お母さんはそれに気づこうとしてなくて、もっともっこわいんだね。」と言ったら、たぶんその解釈は正しいだろうが、その子にレディネスがないうちになにかを押しつけてしまう危険がある。その子が自分の媒体として人形を使う必要があると感じているかぎり、治療者もまたそれを使うべきであると言う。(p.94)

いずれにも解釈の否定も否認もない。むしろ、解釈の明確な指針を示してあまりあると言えよう。それを裏打ちするのは治療者のbeingとしての鏡であることである。

遊ぶことと心理療法—Winnicott  
ところで、健康であるとはどういうことかを

理解する道を発見しようとしてつづけたWinnicottは、健康であることと不健康であることとのきわめてハッキリした調和を理解するにいたる。その鍵が遊び(の内容)から遊ぶことへの眼差しの向け(look)かえである：「精神分析家は遊びの内容を扱うのに忙しすぎて、遊んでいる子どもに眼差しを向け(look)、遊ぶことそれ自体について書くことをしてこなかった。私は名詞の『遊び』と動名詞の『遊ぶこと』の意味に重要な区別をしている。」(Winnicott,1971,p.46)そして、遊ぶことが心理療法の核心であることを発見するにいたる。

#### 1. 遊ぶこと

まず、遊びで子どもの発達と存在感覚がわかると言う：「一連の症例分類に際して人は物差しを用いることができる：物差しの正常端には、内的世界の生活をシンプルに、しかも楽しく劇化した遊びがある；異常端には、内的世界を否定する遊び、つねに強迫的で、刺激に振り回され、不安に駆り立てられ、楽しいというよりは感覚を消耗する遊びがある。」(Winnicott,1958,p.47)

さらに、一見異常と見える行動が子どもや時によっては正常であることがあり、楽しく遊ぶことができているかどうか健康さが育ちつつあるかどうかを担保すると言い、正常な子どもとはどんな子どもなのかについてハッキリ記す：「子どもの遊ぶことのできる能力を大いにたくわえよう。子どもが遊んでいるということは症状が1つ2つ存在するゆとりがあるということであり、また、子どもが一人にせよほかの子と一緒にせよ、楽しく遊ぶことができているということは、非常に重篤な問題がいまここにはないということである。遊びの中でゆたかな想像力が動員され、ゲームが楽しまれているならゲームは外的現実の正確な知覚なしには楽しめないがゆえに一、たとえその子に夜尿・吃音・かんしゃく発作・てんかん発作・抑うつがあったとしても、なんら心配するにはおよばない。遊ぶことができるといことは、それなりに適切で安定した環境があれば、その子がその子なりの生を

展開することができ、やがては世に期待され歓迎される全人になることができるということなのである。」( Winnicott,1964,p.130 )遊びの内容よりも遊ぶこと、自己体験を消化するために、また、コミュニケーションをするために、遊びがどのように遊ばれているかが大切なのである。治療者は子どもの遊びの内容に眼差しを向ける( look )以上に、遊んでいるその子ども自身を目に入れる( see )ことである。

そして、ことばは遊ぶことやコミュニケーションをすることが増幅・拡大されたものであり、遊ぶことのできるキャパシティは大人にとっても子どもにとっても同様大切であると言う：「私が遊んでいる子どもについて言うことは大人にもそのまま当てはまるが、患者の素材が主として言語的コミュニケーションというかたちで現れるので、記述するのがむずかしい。しかし、大人の分析においても、子どもとの作業においてと同様ハッキリ存在する遊ぶことを発見したい。それは、たとえば、ことばの選択、声の抑揚、そして、ユーモアのセンスなどに、おのずと現れている。」( Winnicott,1971,p.46 )

## 2. 遊ぶことと心理療法

そして、あらたな観点から精神分析の治療関係が述べられる。それはおだやかに、しかし根本的に、いわゆるフロイト派の信念をくつがえす。すなわち、心理療法は2人の遊んでいる人からなり、遊ぶことそれ自体が心理療法であると言う：「心理療法は2つの遊ぶことの領域、つまり、患者の遊ぶことの領域と治療者の遊ぶことの領域との重なり合いの中で生じる。心理療法は2人の人が一緒に遊ぶことに関係している。したがって、遊ぶことが可能となっていないとき、治療者の作業は、患者が遊ぶことができない状態から遊ぶことができる状態になることに向けられる。」( p.44 )

すなわち、治療者がクライアントの無意識について何事かを知っていることよりも、遊ぶこと( ができること ) がより重要であり、

精神分析は遊ぶことが高度にソフィスティケートされた形態であり、精神分析があつてこそ心理療法があり、遊びの素材があつてこそ遊ぶことがあるという一般的な説明の順序は逆転される：「精神分析、心理療法、遊びの素材、遊ぶことという順序にこだわることをやめ、これを別のかたちで再構成したい。言い換えると、普遍的なのは遊びであり、それが健康のしるしである：遊ぶことは成長を促進し、したがって、健康を促進する；遊ぶことを通じて仲間関係ができる；遊ぶことは心理療法におけるコミュニケーションの一形態になりうる；最後に、精神分析は、自分自身や他者とのコミュニケーションのために遊ぶことが高度に特殊化された形態として発展してきたものである。本来存在するのは遊ぶことであり、...分析家はFreudのお陰のみならず、遊ぶことという本来存在する普遍的なもののお陰をつねに忘れないことが肝要である。」( p.48 )心理療法はFreudの賜である以上に遊ぶことの賜であり、Winnicottにとって、精神分析とは、無意識の探求というよりは自己の探求であり、自己たるなにかを発見すること、発見し出すことなのである。

したがって、解釈よりも遊び空間の方が重要である、すなわち、解釈が分析家の賢さのためにあるとすれば、子どもの創造性のためにあるのが遊び空間であるということになる：「心理療法家は遊ぶことの内容を素材にするが、子どもが遊ぶこと自体の中にすべてがあることを銘記したい。」( p.59 )これがさきの、「深層に達する心理療法は解釈作業なしに行える。重要なのは子どもが自分自身を突然発見することだ。」「もし心理療法が行われるならば、この遊ぶことは自発的でなければならず、盲従的であったり、追従的であったりしてはならない。」につながる。

この自発性は本物の自己( true self )から生まれる。そして、自発的であるとは創造的に生きているということである。その例証は、とりわけWinnicott『遊ぶことと現実』( 1971 )の第4章「遊ぶこと—創造的活動と自己の探

求」にハッキリ見ることができ、そこでも主題は繰り返される：「心理療法は2つの遊びの領域、つまり、患者の遊びの領域と治療者の遊びの領域との重なり合いの中で生じる。もし治療者が遊べないなら、その人は心理療法に向いていない。そして、もし患者が遊べないなら、患者を遊ぶことができるようにするなにかが必要であり、心理療法はそれからのことである。遊ぶことが不可欠なのは、遊ぶことにおいてこそ患者が創造的でありつづけるからである。」(p.63)

以上を要するに、Winnicottにとって遊ぶ能力は情緒発達の1つの達成であり、遊ぶことにおいて内界と外界が橋渡しされ、したがって、良質の遊びはすなわち創造的生であり、それは自己体験の生涯にわたる母胎なのである。これを治療関係に置き換えると、遊ぶことを通してのみ自己が発見され強化されるがゆえに、遊ぶことは心理療法が究極的に達成しなければならないことなのである(Abram, 1996,p.219)。

## パラドクスと心理療法

—WinnicottとBateson

### 1. 遊びとパラドクス—Bateson

ところで、次のような場面を思い浮かべてみよう。子どもたちが砂場で砂のかけ合いをして遊んでいるうちに泣き出す。大人たちは遊びが遊びでなくなり、争いが本気になったと、やめさせる。が、どこまでが遊びでどこから本気かの境目はむずかしい。しかし、外見上どんなに激しくても、遊びの場合には「これは遊びだ」というメッセージがなんらかのかたちで示し合われている。それを示すゆとりがなくなると、遊びは本気、すなわち、けんかになる。つまり、遊びには「これは遊びだ」というメタレベルのコミュニケーションが含まれている。これは簡単なように見えて、なかなか高次のはたらきである。と言うのは、「これは遊びだ」というメッセージは、エピメニデスのパラドクスに似た陳述の自己矛盾性をもっているからである(エピ

メニデスのパラドクス、別名、嘘つきのパラドクスとは、「クレタ人のエピメニデスが言った。『クレタ人はウソしか言わない。』』という自己言及性のパラドクスである。エピメニデスの言ったことが真とすれば、エピメニデスの言ったことは偽となり、偽とすれば真となる)：「遊びという現象はある程度のメタコミュニケーション、すなわち、〈これは遊びだ〉というメッセージを交換できる有機体にかぎって現れる。...〈これは遊びだ〉というメッセージは、エピメニデスのパラドクスに似たパラドキシカルなフレームを設定する。」(Bateson,1972,p,179,184)

が、「これは遊びだ」というメッセージはそれを突破するはたらきももっている。すなわち、ただ遊んでいるだけでなく、遊んでいることを客観視する眼を含んでいる：「一次過程(primary process)は間断なくはたらいているが、「これは遊びだ」がパラドクスになるのは、心理学的にはこころの中のこの部分のはたらきによる。...と言って、単純に遊びは一次過程の現象であるとは言えない。『遊び』と『非-遊び』の区別は、『空想』と『非-空想』の区別同様、確実に二次過程(secondary process)あるいは『自我』のはたらきによるからである。...〈これは遊びだ〉は一次過程と二次過程との特異な組み合わせの存在を予想させる。...一次過程においては地図と現地は等価である；しかし、二次過程においては両者は区別される。遊びにおいては、地図と現地は等価であると同時に、区別されているのである。」(pp.184-185)

「フレームとパラドクスの問題全体を動物の行動で例証してみる。動物の行動には3種類のメッセージが認められ、あるいは、演繹される：(a)[本当に攻撃するときの攻撃の姿勢や表情など]本稿でムードサインと呼ぶメッセージ；(b)ムードサインをシミュレートしたメッセージ(遊び・おどし・演技など)；そして(c)受信者にムードサインとそれと似て非なる別のサインとの区別を可能にする

メッセージである。〈これは遊びだ〉というメッセージはこの第3のものである。これによって、受信者には、『[動物どうしの]かみつっこをはじめとしてほかの意味をもった行為も、第1の種類のメッセージではない』ことがわかる。かくて、〈これは遊びだ〉というメッセージはパラドクスを発生させるフレームを設定する[遊んでいる人が言った。「私が言うことは遊びだ。」]：と同時に、異なった論理階型(logical type)にあるカテゴリーを区別し一線を描く[「私の言うことは遊びだ。」は第3の種類のメッセージだ]」(pp.189-190)これこそまさに遊びの中で体験されるパラドクスである。遊戯療法場面での子どもたちの「本気にならないでよ!」と同時に、「本気でやってよ!」という声が聞こえてくる。遊戯療法の事例検討会で子どもとのゲームの勝敗に関して繰り返される愚問、「負けてやったのですか?」に対しては、「Both No! and Yes!」と言うしかない。しかし、意とするとところが伝わらないもどかしさ。本気になったら遊びにならない。しかし、本気でなくては遊びにならない。この愚問を発する人には、遊ぶことがまだ成立していないのである。

## 2. パラドクスと心理療法—Winnicott

以上のように、パラドクスという概念を心理学に導入したBateson(1972)らは、パラドクスはこころの進化過程につきものだとする:「パラドクスがなければコミュニケーションの進化は止まる。そのとき生は型にはまったメッセージが果てしなく行きかうだけになり、変化もユーモアも起こりえない厳格な規則にしばりつけられたゲームになる。」(p.193)同様に、Winnicott(1971)は、パラドクスは成熟過程につきものだとする:「パラドクスを受容してください、許容してください、尊重してください、そして、解消してしまわないでください。スプリット-オフされた知的機能へ逃げ込めばパラドクスを解消することは可能だが、その代償としてパラドクス自体がもっている価値は失われる。パラドクスは一

旦受容され許容されると、この世に生きかつ生きつづけるのみならず、過去や未来の文化とのつながりを活用することで無限にゆたかになりつづけることのできるあらゆる人間にとって価値をもってくる。」(p.xii)

Clancier & Kalmanovitch(1987)によると、Winnicottには2種類のパラドクスがある。第1は論理的パラドクスで、存在の連続性(continuity of being)の確保のために現れるもので、1)一人でいられる能力(capacity to be alone) 2)移行対象と移行現象(transition al objects and pheomena)などに見られる。第2は防衛のパラドクスで、存在の連続性の欠如のゆえに現れるもので、3)罪悪感、4)癡狂恐怖(panic fear of breakdown)、5)自殺などに見られる。(p.93)それぞれを簡単に見ておこう。

### 1) 一人でいられる能力のパラドクス

「いろんな種類の体験が一人でいられる能力の確立に寄与するが基本は1つであり、それが十分でないとい一人でいられる能力はできてこない;その体験とは、幼小児期に母親とともに-いま-ここに-いて一人でいるという体験である(being alone in the presence of mother)。このように一人でいられる能力の基礎にはパラドクスがある;それはだれかほかの人とともに-いま-ここに-いて一人でいるという体験である。」(Winnicott,1965,p.30)これがパラドクスになるのは、一人でいるという内的現実の主観的体験と、母親とともに-いま-ここに-いるという外的現実の体験との混同、異なった論理カテゴリーにあるカテゴリーを区別し一線を描くことをしないことによるが、このパラドクスのお陰でこの2つの現実間のコミュニケーションが可能となるのである。

### 2) 移行対象と移行現象のパラドクス

対象は創造されるために発見され、発見されるために創造されるというものである:「健康な場合、幼児は実際には発見されるのを待ってそこにあるにすぎないものを創造する。健康な場合、対象は創造されるのであって、発見されるのではない。...このことはパ

ラドクスとして受容されなければならない、このパラドクスを排除してしまうような小賢しい言い換えによって溶かされてはならない。」(p.181)対象がシッカリした土台をもつためには錯覚(illusion)が必要であり、錯覚が価値をもつためには対象は現実存在するものでなくてはならないのである：「母親は最初幼児にはほぼ100%順応し、幼児に母親のオッパイは自分の一部だという錯覚をもつ機会を与える。…母親の最終的な課題は徐々に幼児を脱-錯覚(disillusion)させていくことだが、最初に錯覚をもつ機会が十分与えられていないと成功の望みはない。別言すれば、オッパイは幼児によって繰り返し繰り返し…創造される。こうした主観的現象が幼児の中で展開するが、私たちに言わせればオッパイは母親のものなのだ。母親は現実のオッパイを幼児が創造しようとするちょうどその時その場所に置くのである。…こうした錯覚がなければ、当人の外部にあると他者が知覚する対象との関係という観念は人間にとって意味を失う。」(Winnicott,1971,pp.12-13)

### 3) 罪悪感のパラドクス

「Freudの著作を見ると本当の罪悪感が意図、無意識的意図の奥にあるようすがわかる。現実の犯罪が原因となって罪悪感が生じるのではない；そうではなく、現実の犯罪は罪悪感-犯罪を行う意図の奥にある罪悪感の結果として生じるのである。」(Winnicott,1965,p.16)そして、犯罪を行うのは他者との接触、葛藤の解決を発見する希望の現れであるとされる：「反社会性は希望も運も悪意もない母性愛剥奪児の中にある希望を表している；子どもが反社会性を顕すということは、その子の中にギャップを埋める道が発見されるかもしれないという希望がきざしてきたことである。」(pp.103-104)

### 4) 発狂恐怖のパラドクス

発狂恐怖はパラドクスである、発狂恐怖は、すでに実際に起こったことはあるものの、まだ実際には体験されたことのない発狂の記憶である：「発狂恐怖は、すでに実際に体験され

たことのある発狂についての恐怖である。…私の経験によると、患者に、あなたの生を破壊している発狂恐怖の発狂ですが、それはすでに実際に存在したことがありますと言う必要のあるときがある。…発狂恐怖は、まだ実際には体験されたことのない過去の出来事 [= 発狂] についての恐怖である。」(Winnicott, 1989,p.90,95)

### 5) 自殺のパラドクス

自殺は他人に殺されることを回避し、生者の世界にとどまるために行われる：「多くの男女が自殺、すなわち、すでに実際に精神に起こったことのある死を身体にももたらすことで解決を発見しようかどうしようかと思いつながら生きている。…(実際自殺した)分裂病の女性患者が言った：『先生にしてほしいことはただ1つ、正しい理由で自殺できるようにしてください。』…(いまになって思えば)彼女は、早期幼児期にあなたは死んだ[=あなたの精神は殺された]と言ってもらいかけたのである。」(p.93)

罪悪感、発狂恐怖、自殺のパラドクスなど、存在の連続性の欠如のゆえに現れるパラドクスは、その欠如の解決策として現れる。これに応えるには、知的機能に逃げ込み小賢しい言い換えをすれば、すでに実際に起こったことはあるものの、まだ実際には体験されたことのないなにかが想起され、そのなにかが実際に体験されること、すなわち、起こらなかった成熟過程の再確立を可能にすることである。発狂恐怖を例にすれば：「その個人の生のはじまり近くで発狂はすでに実際に起こったことがある。患者はこのことを『想起する』必要があるが、まだ実際には起こったことのないなにかを想起するのは不可能であるし、また、患者はそのなにかが起こ[ったこととして体験され]るべくようにはそこに存在しなかったわけだから、過去のこのなにかは実際には起こったことのないものである。こうしたとき『想起する』唯一の道は、患者がいまここで、すなわち、転移の中でこの過去のことをはじめて体験することである。こうして、



過去のことにして未来のこと [ 過去の事実としての発狂と、未来の恐怖としての発狂 ] が、いま-ここのこととなり、患者によってはじめて体験されることになる。これは想起することと等価である。」(p.92)

一人でいられる能力、移行対象(移行現象)のパラドクスは、そこに遊ぶことがあるがゆえに生じ、罪悪感、発狂恐怖、自殺のパラドクスは、そこに遊ぶことがなかったがゆえに生じる。いずれにせよ、治療者は遊ぶ能力のある母親になり、前者においては遊ぶことが死なないように、後者においては遊ぶことが生まれるように、鏡というbeingになる(前者は空間面上のパラドクス、後者は時間軸上のパラドクスと概念化できるかもしれない。そして、パラドクスということばを使えば、いずれの場合においても、パラドクスを受容し許容し尊重し、解消したり排除したりしてしまわないということである)。

### 3. 遊びと心理療法

Bateson(1972)に戻る:「遊びのパラドクスは進化過程に特徴的なことだった。同様のパラドクスが心理療法と言われるあの変化過程においても必然的な構成要素になっていると言いたい。治療過程と遊び現象との類似は見かけとは異って通底している。両者とも境界のハッキリした心理的フレーム[ <これは遊びだ> <これは心理療法だ> ]の枠内で起こり、そこでかわされるメッセージは時間的・空間的にその枠内のものであることとされる。遊びにおいても治療においても、それらのメッセージはより具体的で基礎的な現実[ <これは遊びだ> <これは心理療法だ> ]と特別にして独特な関係にあると言えよう。遊びにおける闘いもどきが本物の闘いではないのと同様、治療における愛もどきや憎しみもどきも本物の愛や憎しみではない。『転移』は本物の愛や憎しみから心理的フレーム[ <これは心理療法だ> ]を思い起こさせるシグナルによって区別される; 実にこのフレームがあるからこそ転移は存分に開花することができ、また、治療者と患者はそれについて語り合う

ことができるのである。」(p.191)心理療法には遊びのパラドクスに通底するパラドクスがあるということは、そこはパラドクスを介して遊びがつねにある場所でありうるということである。遊びは心理療法の必然的な構成要素であると言ってもあながち乱暴ではないかもしれない。また、心理療法という枠があるからこそ転移が開花しえ、かつ、それについて語り合えるということは、そこにおいて心理療法の場と日常生活の場が橋渡しされ、この2つの場の間のコミュニケーションが可能となるということである。しかし、語り合うというdoingがなければ治療にならない。

具体的には:「治療という心理的フレームの枠内で『ことばのサラダ』を発することは、ある意味で、病理的とは言えない。実に、特に神経症者の場合は、文字通りそれをするように励まされ、夢や自由連想が口にして語られ、そして、患者と治療者はその素材を理解しようと努める。解釈過程によって、患者は、これまで抑制したり抑圧したりしてきた一次過程の思考の産物は『かのような』もののだと納得させられる。空想の中に真実が含まれていることを学ばなければならないのである。分裂病者の場合、問題は若干異なる。分裂病者の誤りは一次過程のメタファーをまったく文字通りの真実として扱うところにある。メタファーがなにを代現しているのかの発見を通して、メタファーはメタファーにすぎないことを発見しなければならない。」(p.192)「父を殺したい」という一次過程の思考が抑圧されている神経症者は、自分は「あたかも父を殺したいかのようなのだ」と納得することを通して、一次過程の中に真実が含まれていることを学ぶ。「人間は悪魔だ」という一次過程のメタファーを文字通りの真実として扱う分裂病者は、そのメタファーが代現しているものの発見を通して、一次過程は一次過程にすぎないことを発見する。

おわりに

紙幅がつきるがゆえに連想の記述もここで

終わる。が、いのちつきるまで連想に終わらないことはハッキリしている。beingとdoing、そして、パラドクスをめぐって進みそうである(岡村,1999)。

もう一つハッキリしているのは、大切なのは問いつづけることだ、あるいは、あらたな問いが生成するような答えを発見しつづけることだということである。ここではハッキリと問うということの優位、途上にある答えを問いとしてつかみ取ることの重要性を痛感すると記したい(Heidegger,1953;岡村,1996)。

## 引用文献

- Abram, J. : The language of Winnicott. Karnac Books. 1996.
- Axline, V. M. : Play therapy. Churchill Livingstone. 1947.
- Bateson, G. : Steps to an ecology of mind. Jason Aronson. 1972.
- Clancier, A. & Kalmanovitch, J. : Winnicott and paradox. Tavistock. 1987.
- ハイデガー-M. 川原栄峰(訳) : 形而上学入門 平凡社 1994  
(Heidegger, M. : Einfuhrung in die Metaphysik. Max Niemeyer Verlag.1953.)
- 岡村達也 : 早期教育と現代青年像 高良 聖(編) : 警告! 早期教育が危ないー臨床現場からの報告 日本評論社 1996 Pp.137-156.
- 岡村達也 : 分裂病青年の事例ーMr.Vac 田畑 治(編) : 現代のエスプリ374 クライアント中心療法 至文堂 1998 Pp.148-157.
- 岡村達也 : カウンセリングの条件ー純粋性・受容・共感をめぐって 垣内出版 1999
- Winnicott, D. W. : Through paediatrics to psycho-analysis. Basic Books. 1958.
- Winnicott, D. W. : The child, the family, and the outside world. Penguin Books. 1964.
- Winnicott, D. W. : The maturational processes and the facilitating environment. International Universities Press. 1965.
- Winnicott, D. W. : Playing and reality. Penguin Books. 1971.
- Winnicott, D. W. : Psycho-analytic explorations. Harvard University Press. 1989.

## 参考文献

- Geissmann, C. & Geissmann, P. : A history of child psychoanalysis. Routledge. 1998.
- 村瀬孝雄 : 臨床心理学の基礎 河合隼雄・福島 章・村瀬孝雄(編) 臨床心理学大系1 臨床心理学の科学的基礎 金子書房 Pp.1-25 1991
- 中村雄二郎 : 述語集ー気になることば 岩波書店 1984
- Newman, A. : Non-compliance in Winnicott's words. New York University Press. 1995.
- 岡村達也 : ウィニコットのこぼれ話 ACO NEWS (朝日カウンセリング研究会),54,1,1996.
- 佐治守夫・岡村達也・保坂 亨 : カウンセリングを学ぶー理論・体験・実習 東京大学出版会 1996
- ワツラヴィック P.・バヴェラス J. B.・ジャクソン D. D. 山本和郎(監訳)尾川丈一(訳) : 人間コミュニケーションの語用論 二瓶社 1998  
(Watzlawick, P.,Bavelas, J. B. & Jackson, D. D. : Pragmatics of human communication. W. W. Norton.1967.)

## 謝 辞

本研究には文教大学平成11年度個人研究費および共同研究費を使用した。